

あるむぜお62

府中市郷土の森博物館だより

a | museo NO.62

2002年12月20日



府中ロストワールド
3

目次

- 1-2 府中ロストワールド 3
- 3 展示会への紹介「発掘された日本列島 2002」
- 4-5 ノート「土蔵解体と醤油屋」
- 6 最近の発掘調査 府中にもあった！弥生遺跡
- 7 府中発掘事始 3 日本最初期の電気探査
- 8 展示室から・元気！ボランティアだより

冬の旅

村野四郎

飢えた犬は
凍る路上に
交尾の舌をたらし
風は 巡礼の大群のように
零落しておちていく





自然は
さまざまなものの相^{すがた}を変え
賜^{にえ}の贅^えさえ
枝の先に
死の形としてのこる

だが われらの冬に
絶対によみがえらない
一つのオブジェ
濃硫酸にしずむ鉄片のように
恐怖の底で ただ
溶けてしまうもの

府中ロストワールド
記録の中にしかみることのできない失われた風景を
1980年（昭和55）府中市発行の
写真集「むかしの府中」に探してみます

3 冬の多摩川

「むかしの府中」No.140
1935年（昭和10）頃
現 府中市住吉町5丁目付近

「武蔵野」を分け入る路^{みち}が凍り、風が「巡礼の大群のように零落^{れいらく}しておちていく」季節、台地の下を流れる多摩川も、すっかり装い^{よそお}を変えていました。夏から秋、あんなに暴れて人々を驚かしたこの川も、水かさを減らし、老体をさらしたうえに、今日はうっすらと雪化粧をしています。

写真は1935年頃の「関戸の渡し」^{せきと}付近の多摩川。手前にピンボケの川原石が見えているので、撮影者は水が減った中州^{なかし}状のところに立って、上流を見つめているようです。

戦後は奥多摩に小河内ダムができるなどして、年間を通じて水量は極端に少なくなりましたが、水が減るのは当時まだ冬だけの現象だったようです。だからこそ、橋のない川^{とせんは}の渡船場にも、丸太を使って仮橋^{かりはし}が組まれました。府中の人たちは、対岸の多摩丘陵をムコウヤマと呼び、農家にとってはクズハキをする大切な場所でした。堆肥にする落ち葉や燃料にする枯れ枝^{かしりこ}を確保するために、秋が深まる頃、川を渡ってヤマに入りました。

ここに初めて恒常的な橋が架けられるのは1937年ですから、写真に写っているのは仮橋でしょう。右端には、橋の管理もしていた渡船場の詰め所。標識らしきものも立っています。この季節は出番のない何艘かの舟が、橋脚の向うに見えています。橋の用材^{えつみかせ}の収納庫なのか、長い間東南からの「辰巳風」を受

けてきた松林の中に、建物があります。橋は中州に向かつて緩やかにスロープを下り、いったん中州を歩き、その先また仮橋がつながっていたといえます。向こう岸は関戸（現・多摩市）です。

実は、このあたり、かつて歴史を大きく賑わせた場所でもありました。関東を南北に貫く陸上交通の大動脈が、ここを通過^{とうさんとうむさしみち}していたからです。奈良時代の初め、東山道武蔵路という大きな道路が造られ、これと水上交通の大動脈である多摩川が交差する地点に、国府が置かれました。この地域は武蔵国の政治・文化の中心として俄に登場したのです。これが今の府中の街の出発点です。

中世には鎌倉に向かう鎌倉街道がここを通りました。鎌倉幕府が滅亡する直接のきっかけの一つ、「分倍河原合戦」もこの近辺で行われました。幕府を倒そうとする新田義貞らの軍、これを迎え撃つ北条氏の軍。武蔵国府の持つ政治的な重要性和、多摩川の軍事的な防衛線^{ようしやう}の奪取をめぐる壮絶な闘いが、陸上と水上の交通の要衝で行われたのです。

鏡のように静まりかえった川面に人影のない風景。冬の多摩川は、長い歴史の1コマをほんのひと時回想しているかのようです。

（小野一之）

特別展

展示会への招待 □

発掘された日本列島

2002

新発見考古速報

2003/1/25(土) - 2/23(日)

観覧料：大人 500 円 子供 150 円 (博物館観覧料含む)

全国各地の遺跡・出土品の中から、選りすぐりの 41 遺跡、約 500 点がやって来ます。

3万5000年以上前と推定されている旧石器、縄文人の一大葬祭場跡出土の土偶や岩偶、弥生の甕棺墓に副葬されていた青銅製の武器、古墳時代のヨロイやカブトの形をした土製のミニチュア祭祀具、飛鳥時代の車輪、元寇の役でつかわれた「てつぼう」などなど。

なかでも見逃せないのが、長野県竹佐中原遺跡の旧石器と、鳥取県青谷上寺地遺跡の弥生人骨です。

竹佐中原遺跡の旧石器は、後期旧石器時代よりも古い可能性が指摘されている注目の資料。あの捏造事件の発覚以来、日本列島における後期旧石器時代以前の遺跡の存在が危ぶまれるなかで、前期・中期旧石器研究の再出発を飾る石器群です。今のところ出土した地層から年代を推定することは難しいものの、後期旧石器時代とは明らかに異なる製作方法を用いているといいます。今後の慎重なそして透明性のある検証を期待したいところです。

青谷上寺地遺跡は弥生時代の遺跡としていま注目度 No. 1 の遺跡です。現在も調査中で「弥生の博物館」と呼ばれるほど多彩な遺構や遺物が出土しています。今回はそのうち殺傷痕のある胸椎(背骨の胸の部分)や上腕骨、結核菌に感染して変形した胸椎などが出品されます。遺跡では溝状の遺構から500点以上の人骨が、無秩序に折り重なる状態で出土したといいます。今後の調査によって、弥生時代の社会を多角的に復元していくことのできる遺跡といつてよいでしょう。なお、本遺跡では頭蓋骨内から脳みそが発見されています。弥生人そのものの研究を飛躍的に進める材料になることは間違いありません。ただし、残念ながらこの脳みそはレプリカでの展示です。

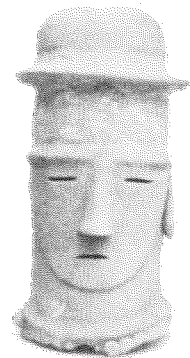
もちろんここに紹介したのは、担当者の完全な好みです。41遺跡からエントリーされた出土品はどれも研究上に重要な位置をしめるものばかりです。列島に生きた人々の息吹を感じながら、あなた自身が遺跡や出土品を吟味してみたいかがででしょうか。



秋田県向様田 A 遺跡出土の玉類



長野県竹佐中原遺跡出土の旧石器
(長さ 12.3cm)

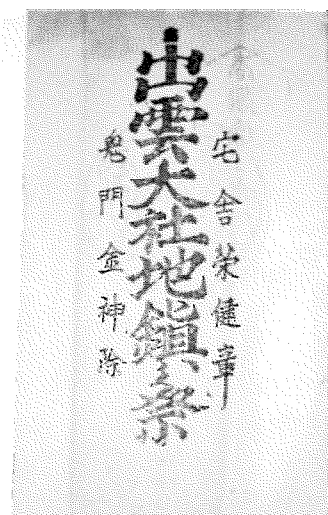
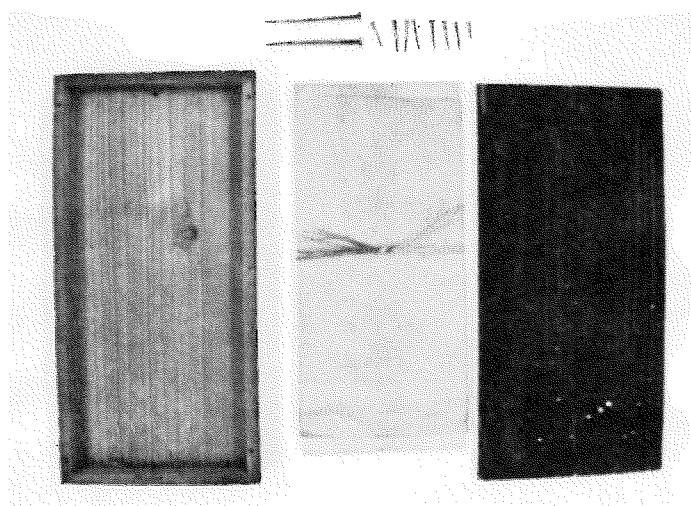


東京都柴又八幡神社古墳出土の人物埴輪
(高さ 20.5cm)

特別展「遺跡の世界 2002」

恒例となった、府中版の考古速報展も開催します。今回は、府中市域で初めて見つかった弥生土器をはじめとする最近の調査成果に加え、古代武蔵国府のなかに営まれた寺と社にスポットをあてて、国府の空間や人々の信仰について考えてみたいと思います。

2003年1月12日(日)～3月2日(日)
博物館観覧料(大人100円 子供50円)



去る夏前のことでした。市内宮町の菊池敏夫氏より電話がかかりました。「今度家を壊すことになりましてね。蔵の中のもので博物館で要るものがあればと思ってね」というご連絡でした。少し江戸時代の府中の歴史に興味のある方なら、菊池家といえば、「府中市郷土資料集3 菊池家文書」として上梓されている古文書を所蔵され、幕末に府中新宿の名主も勤めたお宅だと思い出されるでしょう。お宅は旧甲州街道沿い北側、伊勢丹デパートの東側の区域です。

早速行って、お話を聞いてみたところ、母屋は昔のままに手を入れながら住み続けていらっしゃったとのこと。外側からは分かりませんが、梁の材の太さや構造は確かに今の建築ではありません。

ご主人が「現在の母家の以前の家が火事で焼けた時に、土蔵は番場の醤油屋茂八っていう人が味噌で塗りこめてくれたので焼け残ったそうですよ。その人の名前が扉に書いてあるんですよ。それと昭和53年の改修の時にははずしたのですが、母屋の天井裏の棟にこんな箱が打ち付けてありましたよ。」と仰りながら持ち出してくださったのが上の写真の木箱です。28.7cm×14cm 高さ3.1cm、かなりすくて黒くなっている上に、蓋は真中で二つに割れていますが、表面にかすかに「天保九戌年 御札」の字が読み取れます。

合わせ蓋を取ると、はずした釘と紅白の水引が掛かって包み紙にくるまれた御札が入っていました。それには「出雲大社地鎮祭」と真中に大書され、両側に「宅舎栄建章」「鬼門金神除」とあります。

鬼門とは良く知られているように、陰陽道で鬼が出入

りするとして忌み嫌われる東北の方位を指し、そちらの方にいるのが金神とされます。この御札は新築に当って鬼門除けに付けられたものでしょう。

これからすると、母屋の建てられたのは天保9年(1838)とみて間違いなさそうです。

この時代の火事として一番思い当たるのは、天保6年(1835)12月の府中宿大火です。2時間ほどの間に、新宿の東端から番場の長福寺傍まで焼き尽くした大火事でした(註1)。

この火事の後、同じ宿内の比留間氏は、翌7年には「町方一同夫々普請心掛ケ大二取込混雑」と記録しています(註2)、当時新宿の間屋場でもあった菊池家が9年まで再建されなかったというのは少し間があき過ぎている気もしますが、それまで仮住まいだったとしてもおかしくないとも思われます。あるいはこの間に記録に残っていない火事がまだあったのでしょうか。

いずれにしても今から170年程前には既に在ったという土蔵なので、本来なら母屋共々保存をしたいところですが、なかなかそうもいきません。せめて調査だけでもしようということになり、郷土の森博物館の復元建物のメンテナンスなどでお世話になっている文化財工学研究所にお願いする事になりました。

解体調査

そして、土蔵の中の品物を整理していただき、まだ暑い盛りの8月末、3日間かけて建築的調査が実施されました。以下はそのレポートからの報告です。



土蔵西側

現状は、2間×3間の大きさと内部は2階に分かれ、1階南側正面の出入口には、両開きの土扉、片引土戸、潜り戸付の片引き格子戸があります。1、2階とも東側にある窓も両開土扉、片引土戸、片引ガラス戸の3重になっています。

外観、内部とも当初の面影が残り、木組みが太く良質の材料が用いられているものの、調べてみると種々手を加えた跡も見られました。

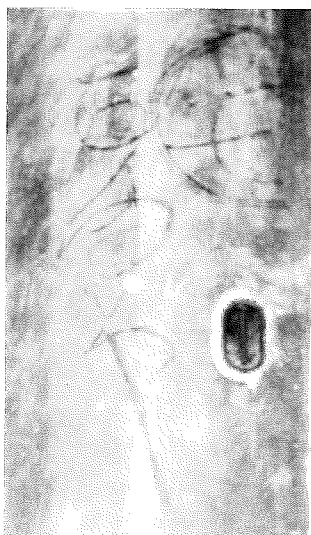
まず、土台下の基礎がコンクリート製、腰巻はモルタル仕上げになっていました。これは、ご主人のお話で、大正12年(1923)関東大震災の折に壁の一部が剥落し、基礎も直したと伝えられているそうなので、この時期の改変の可能性が高そうです。

窓のガラス戸も当然江戸時代のものではありませんが、その敷居・鴨居などの造作は、当初の材らしいので、板戸が障子か何らかの建具はあったと見られます。

また、土蔵はたいてい屋根を二重にし、防火のために下屋根は壁同様塗り固め、その上に茅葺きなどの置屋根を載せます。この置屋根の屋根部分は合板の下地に鉄板で葺いてあったので後世の改変ですが、それを支える登梁は当初材かと思われる程古びていました。

出入口の上には母屋との行き来に便利のように鉄板の屋根が架けられています。これも後からのものです。

面白い事に、いつの造作かは分からないのですが、床下を108cm×109cmくらい長方形に掘って、深さは40cm以上木炭が敷き詰めて



引戸サイン

ありました。最近見直されている湿気取りの方法でしょう。

そして、いつもは利便のために開けたままにしてある為、陰になって見えない片引土戸をヨッコラショと引き出してみると、件の墨書がありました。確かに「㊦ 正ゆや」と読めます。

醤油屋 茂八

土壁は火に強いので、大切なものは土蔵にしまわれているのですが、戸や窓の隙間から火が入ってしまえば元も子もありません。ですからすわっ火事！という時はすぐ泥で塗りこめるのが常道でした。それをこの土蔵の場合は味噌でしたということです。

さて緊急時にサインまでしていったという醤油屋 茂八さんの姿がもう少し明らかになるでしょうか。

菊池家文書の中に母屋の建造と同じ頃の天保9年(1838)と12年(1841)の府中宿の職業調査の記録がありますが(註3)、この中では醤油屋は調査対象になっていないらしく1軒もあがっていません。

しかし、市内の屋号調査報告書(註4)によれば、市内には数軒「醤油屋」と名乗っていたお宅があります。菊池さんのお話の番場(宮西町)では小林さんが江戸の後期から味噌・醤油の製造をしたとあります。ご先祖に茂八という名の人もいるそうです。

もしこの話が天保9年で誤りがなかったら、大火事の被災記録として美好町の小川家に詳細な府中宿の絵図が残されていますが(註5)、番場の小林さんの所は茂八さんではなく、父親の権左衛門さんになっています。茂八さんはまだ家督を継いでいないようです。

味噌屋の若旦那の茂八さんは、自分の家の方にも火が来そうなのに、よその土蔵を守りに行っているんですね。菊池さんのお宅以外にも回っているかもしれません。もしかしたら、これは商売として成り立っていた可能性も有ります。サインはその昔の武士が戦場に馳せ参じた時に、後の論功行賞の証拠として提出した軍忠状同様、建物が無事被災を逃れた時には大いに意味があったのではないのでしょうか。もっとも味噌屋さんにそういう商売の面があったと言う話は今まで聞いたことはないのですが、緊急事態に手っ取り早い材料ではありますね。

またひとつ府中宿のなごりが消えていきました。国府の時代からこうして建て替え建てかえ、街は変わってきたのです。

註1 「郷土の森博物館ブックレット1 甲州街道府中宿」

註2 府中新宿 比留間家文書

註3 「府中市郷土資料集 6」所収 No.86 87

註4 「府中市立郷土館紀要」第9号

註5 前掲註1参照

最近の発掘調査

府中にもあった！

弥生遺跡

東京競馬場地区
府中市教育委員会 和田 信行



出土した弥生時代の壺形土器

今回は府中市にとってまさしく新発見の話題をお届けします。なんと、府中で初めて弥生時代の遺跡が発見されたのです。

弥生時代は紀元前300年～紀元後300年の600年間、一般には、稲作が開始された時代とされています。この時代は前期・中期・後期の3つに区分されています。

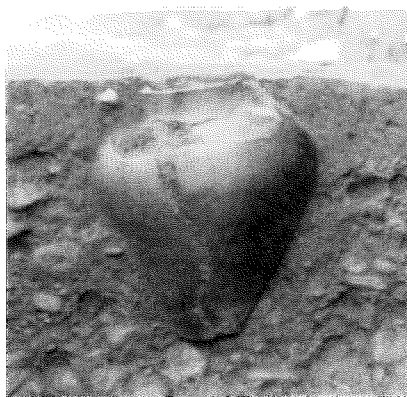
今回、弥生時代の遺跡が見つかった場所は、みなさんもよくご存じの東京競馬場のなかです。現在、競馬場は新しいスタンドの工事を行っていますが、この工事前に行った発掘調査で見つかりました。

見つかった遺物のうち最も状態がよかったのは、2つの壺形土器です。上の写真に示したのは、完全な形を残したもので、高さ約32cm、その外面は縄目の文様が施され、非常に丁寧に作られています。もう一つは上部が失われていますが、高さ約32cmが残っていました。興味深いのは、この土器は2点とも、掘り穿められた穴のなかから、直立した状態で出土していることです。弥生人が意識的に土器を埋めたことは明らかで、類似した出土状態を示すものとして、弥生時代の墓の一種である「再葬墓」があります。断定はできませんが、壺形土器を埋めた遺構は墓である可能性が高いと考えられます。

このほかにも、これとほぼ同じ時期と考えられる弥生土器が出土しています。注目されるのは、九州北部を初源とする遠賀川式土器によく似たものや、東海地方で作られた水神平式土器と考えられる破片です。これらは弥生時代前期末に属し、およそ2,200年前のものと推定されています。

府中市の外に目を向けると、同時期の遺跡は、多摩市や日野市、狛江市で見つっていますが、主に土器のみで明確な遺構の発見はありませんでした。今回の発見は、府中市ではじめて弥生時代の遺跡が発見されたというだけでなく、周辺地域を含めて、はじめてこの時期の遺構を発見した点でも重要です。さらに、東京競馬場内では別の地点からも大量の弥生土器の破片と石器が散乱した状態で見つかりました。石器製作跡の可能性が高いと考えられます。

今まで弥生時代の人々の足跡は、市内では何一つありませんでした。今回の発見を機に、徐々に弥生時代の様子も解明されることでしょう。



壺形土器が出土した状態
もう一つの壺形土器も、8m離れた所で同ような状態で見つかった。

日本最初期の電気探査

本シリーズの一回目で、一九五四年七月に行われた片町遺跡の発掘調査を、今日も続けられている国府跡発掘調査の出発点と評価した。しかし国府跡の考古学的な解明を目的としたもののほかに、もう一つ興味深い調査が、やはり片町遺跡の調査を主導した甲野勇さん達によって、府中で行われている。電流を地中に通してその抵抗の違いによって遺跡の存在を推し量る、電気探査である。

舞台は、府中市武蔵台の都立府中病院構内に今も残る「せんげん山」と呼ばれた塚である。発掘調査に先立つ一九四八年四月、資源科学研究所の中島壽雄・岩津潤さん等の協力で実施され、頂上より地下四〇六mの所に微かに抵抗が認められたという。塚は一辺約二四mの方形で、当時高さは約五mもあつたというから、何らかの遺構が塚の基底部付近に眠っていると予測されたのである。そしてこれに続く発掘では、粘土に覆われた棺の痕跡らしきものが発見され、甲野さんは奈良時代墳墓の一種と推定している。そもそも甲野さんはせんげん山を古墳と考え、埋葬施設の手掛かりを得るために電気探査の実施を計画したのだった。発掘調査技術の未熟な段階であることや、古墳であるとの先入観をもって調査に取り掛かっていることを差し引くと、この推定を鵜呑みにすることはできないが、地下に眠る遺跡の状態を科学的に推測した試みは特筆

してよく、今日行われている様々な科学的探査の先駆けでもあつた。

本来、電気探査は鉞床の探索に用いられていたものである。これが遺跡の探査に導入されたのは一九四六年、イギリスが最初だったらしい。日本でもやはり鉞床の探索を目的に戦前から研究が進められていて、これを応用して、上述の府中市せんげん山で埋葬施設の探査が試みられたのだ。

もっとも、ほぼ同じ頃、資源科学研究所の中島さん・岩津さん達は、縄文時代の貝塚遺跡として名高い姥山貝塚（千葉県千葉市）でも、貝層と竪穴建物跡（竪穴住居跡）を対象にした調査を行っていた。この調査がいつ行われたのかは明らかでなく、せんげん山の調査の直前であつた可能性が高いが、日本最初期の電気探査が府中で行われていたことは間違いない。しかも手元の資料では、同四八年一二月頃にも、甲野さんは府中市内の古墳と思しき塚の発掘に先立ち、電気探査を実施している。当時、府中は電気探査のメッカだったのである。

しかし、甲野さん達の試みは、発掘調査を取り巻く環境の違いもあって、残念ながら根付くことはなかった。発掘調査の世界に電気探査が普及するのは一九八〇年代頃である。甲野さん達の試みはあまりにも早すぎたのかもしれない。

（深澤 靖幸）



せんげん山での電気探査の様子

最初期の電気探査の様子を記録した貴重な写真。電気探査は科学的な遺跡の探査方法の主流であるが、最近ではその目的に応じて、磁気探査、地中レーダー探査、電磁誘導探査が使い分けられている。

ここ郷土の森博物館には大勢の子どもたちがやって来ます。家族に連れられて来ること多いのですが、学校の遠足や社会科見学でやって来る子どもたちも4割くらいを占めています。春、秋はちょうどそのシーズン。館内も大にぎわいとなり、私たちが彼らに説明をする機会も多くなります。博物館に来たことはあっても、説明を聞くのは初めての経験、という子たちばかりですから、どんな話を聞くのか興味津々、私たちも緊張します。子どもたちの反応によっては色々な話が引き出されて、ついつい予定の時間をオーバーしてしまうこともしばしばです。逆に私語が気になり、説明の途中で仕方なく注意をする例もあります。子どもの態度は正直なので、解説員の嬉しさも怖さも半分ずつ。

博物館で説明をすることを始めて10数年。子どもたちが分かりやすいようにと、私たちが説明用にパネルや解説用グッズ（と呼んでいます）を作ったり、集めたりしてきたので、彼らも関心を持って聞いてくれているな、と感じます。こちらの説明を聞いてからだ、その後の自由見学の時間も熱心な様子です。

見学中、質問攻めに会ってずっと話し続け、帰ったあとはぐったりの時もありますが、「また来るねっ!」と言って帰っていった後日、家族と一緒に「また来たよ!」と挨拶されるような嬉しい出来事もあったり、「今日はすごくためになったよ」「昔の人ってすごくよく考えているんだね」という感想の言葉を子どもから直に言われて、こちらが感激したり、と素直な心に接する喜びも多いのです。

もちろん、お父さんや、お母さん、お祖父さん、お祖母さん、といった身内の方が一緒に話をしながら見るのが何より彼らの経験になると思います。次はぜひ一緒に出かけください。(Y.Y.)



展示室から

展示探検

たびっとくん&たびがらす

博物館の中の子どもたち

元気!

博物館ボランティアだより ③

今回は3グループめの復原建築班の紹介です。

郷土の森博物館には、府中に所在していた旧第一小学校校舎、旧町役場、古民家など合計8棟を移築・復原し地域文化の伝承と普及を図っている建物群があり、復原建築班はその維持・管理の手伝いをしています。

メンバーは10名で、主な作業は茅葺き屋根の古民家、越智家・河内家の「くん煙」、つまり虫除けなどの保護のため、園内の落ち葉をいりりて焚き、その煙で家の中や茅葺き屋根をいぶしていくという作業です。冬期は週1回、その他の時期は週2回、家中の木戸、障子類を閉め切り、もくもくとする煙にまみれてくしゃみと涙に耐えながら作業をしています。今となっては珍しい作業なので来館者からの質問も数多くあり、会話ははずみます。また、水車小屋の石臼を使用しての蕎麦挽き実演、椎茸栽培なども行っています。



今年は越智家の庭で畑を耕し瓢箪、糸瓜、茄子などを栽培しました。

特に瓢箪は茎の脇芽つみ、摘心、誘引等、真夏の厳しい日差しの中の作業でしたが、皆さんの努力が実り、8月下旬から大瓢箪、千成瓢箪のユーモラスな果実がたわわにぶらりと垂れ下がり、来館者の目を楽しませてくれました。9月下旬から収

穫し、水漬けにして果肉を取り除き乾燥。表面仕上げをして作品作りに挑戦していく予定です。

収穫した野菜や瓢箪などは来館者に配ることもあります。ボランティア活動への理解を深めていただくことに繋がっていくのではないのでしょうか。これからも自主的、積極的に活動範囲を掘り起こし、有益で、楽しくなる様な活動をしていきたいと思います。

(ボランティア 岡 正義)